

**福島原発事故独立検証委員会
ヒアリング内容**

【 海江田万里 前経済産業相 】

実施日：2011年10月1日

一般財団法人日本再建イニシアティブ



RJIF
Rebuild Japan Initiative Foundation

司会 海江田さんについては私から皆さんにご紹介するまでもなくご存じですから控え
ますけれども、万里というお名前は、お父様がジャーナリストで中国にいらっしやって中
国との縁が非常に深い方で、大陸的な風貌、大陸的なおおらかさが持ち味の方です。

危機のときには、最初の夜は総理の執務室の隣の応接で寝泊まりをされて、司令塔のど
真ん中で対応に当たられた方でいらっしやいました。

それでは海江田さん、最初に少しお話しただいて、後で質疑応答ということでよろし
くお願いします。

海江田 海江田です。どうぞよろしくお願いいいたします。実は、今日はなるべく正確な記
憶に基づいてと思いい資料も一応持ってきましたが、車の中にカバンを入れて、ドアがロッ
クしてしまいました。それでこちらにお邪魔するのも遅れて、いま手元に全く資料があり
ません。そういう意味では日時など若干正確な数字を言えない部分がありますが、それは
ご勘弁をいただき、もし正式なレポートなどにするということであれば後で確認をしよう
と思います。ですから本当に恐縮ですが、私の記憶の中でのお話になります。

今度の原子力発電所の事故、福島第一原子力発電所の1号機から3号機まで、格納容器
の底部の温度が何とか100度を切ったということですが、100度を切ったことだけで冷温
停止とはなりませんけれども、100度を切ることは冷温停止の定義づけの中で大変重要で
すので、その意味では一応収束に向かっていると思っています。

随分意見のあった循環型の水の処理も、ご承知のように最初はいわゆる「水棺」という
ことを考えていました。石棺という石の棺桶はあるわけですが、水の水棺桶というのは聞い
たことがありません。ただ、水を格納容器の頂部まで入れて水づけにするということでは
水棺という言葉があったわけですが、当初はそれを考えていたわけですが、それが失敗をし
まして、急遽循環型の冷却システムを構築しようということでした。水棺型がだめになっ
たことから冷却型にという範囲での切りかえは、それほど時間がかからなかったと記憶して
います。

水棺型がだめになったところで、もう水を使った冷却のやり方はだめではないだろうか
という意見もありましたけれども、これは東電の技術陣が中心になってやりました。もち
ろん、私もずっと東電のオペレーションルームに詰めていました。いま私はもうご案内の
ように経済産業大臣の職を離れましたから詰めておりませんが、あの東電のオペレーシ
ョンルームに詰めていたのは、当初からいうと私だけでした。途中、細野さん(当時は首相補
佐官)が来ましたが、細野さんはどちらかというとは最初はアメリカとの対応をやっていた
ので、オペレーションルームにずっと長くいたのは私ではないかなと思います。そのほかの
政治家で時々出入りはありましたけれども、ずっといたということではありません。

いま東京電力の発電所の1号機、2号機、3号機を見渡せるカメラがありますね。昨日
の朝日新聞の記事で私はびっくりしましたがけれども、事故が起きたときのあのカメラの映
像を、東電が隠していたのではないだろうか。さすがに見出しのところにはクエスチ
ョンマークがついていましたけれども、あたかも事故発生当時の映像があつて、それを何か

隠しているような。これは国会で質問があったわけですが、そういう記事が書かれていました。

あのカメラは、当初ついていませんでした。私どもは、(3月)15日に東京電力に行きました。15日というのは、それぞれ号機によって時間と日にちは違いますが、ご案内のように水素爆発がその前から相次ぎ、あるいは黒煙が上がったりということがありました。黒煙が上がったのは14日か15日か、また、その後も白煙が上がったりしました。民放のテレビでは映っていますから、一体どうなっているのかを東電のオペレーションルームに確認しました。現地では、いないときもありましたが吉田所長がメインで、「そうですか、煙が上がっているんですか。ではとにかく、すぐ外に行って見てきます」と、こういう状況だったわけです。それではだめだから、とにかく発電所の状況がわかるカメラを備えつけろと私が言いまして、そこからカメラの備えつけをしたということです。ですので、事故が発生した当初はそういうカメラはなかったわけです。むしろそういうものがなかったことのほうが問題だと私は認識をしていますが、実際にカメラが備えつけられたのは17日か18日ぐらいではないだろうかと思います。

そういう形で、いろいろマスコミ報道の中にも事実と違うこともあります。それから、このことは細野さんと枝野さん(当時、官房長官)には言うておきましたけれども、やはりその辺の事情をわかっていなかったということもあります。それからもちろん一人一人に思い違いがありますから、今回の事実関係の検証もかなり重層的にいろいろな方の意見を聞いて、本当に真実のありかを探らなければいけないかなと思います。

後でいろいろな形で評価が下されるだろうと思いますけれども、私自身は間違ったこと、大きなミスをしたとは思っておりませんので、聞かれれば正直にお答えをするというのが私の基本的な態度です。

もちろん SPEEDI の情報は本当に残念なことでしたし、これはもう私自身不明を恥じなければいけません、SPEEDI の存在を知らなかったということは確かです。当時私の周りにおりました政治家、技術者——東電からは、武黒さん(元副社長)が一番長く一緒に官邸でいました。今、官邸の5階、総理執務室のわきの応接室という話がありましたけれども、11日の夜はまだあそこに移っておりません。地下のオペレーションルームのわきに中2階がありますが、狭いところで、最初はその中に閉じこもっていました。ただ、オペレーションルームは、いろいろな安全保障上の秘密がありますのであまり詳しいお話はできません。総理執務室の隣に上がったのは、2日目か3日目ぐらいでした。1日目ではありませんでした。一番覚えているのは、2日目の払暁に総理が現地に行って帰ってきてから、総理執務室の隣の応接室を使っていろいろ対処に当たったということですから、2日目の昼過ぎぐらいからそちらへ移ったのだらうと思います。

東京電力の武黒さん、あるいは保安院の人間が何人かおり、安全委員会の班目さんは1日目の夜からずっと一緒に、最初は地下のオペレーションルームの中2階みたいなところ、その後、総理の執務室のわきに移りましたが、このいわば原子力対策の最高指揮部隊の間

では、残念ながら SPEEDI は一切話題に上がりませんでした。何で話題に上がらなかったかというところ、そういう存在を知らなかったからで、これは本当に不明を恥じなければいけません。ほかの方々も、それぞれ理由があるかと思いますが、知っていれば当然のことながらあの SPEEDI のデータはどうした、早く持ってこいということを聞くわけですが、存在を知らなかったからそういうことが言えませんでした。

ご承知のように、SPEEDI の資料は 11 日の夜 9 時か 10 時の段階で第 1 回の試算をやっています。もちろん正式、正確なデータはありませんから、仮の数字を置きました。最初は、1 号機のベントをやったときを仮定に置きました。ベントを数時間やって、そのときどのくらい放射性物質が出るかを条件に置いて、ではこういう形になるのではないかということです。この 1 回目の計算は、実は官邸には届いていませんでした。2 回目は日付が変わった翌日の 1 時ごろにやり、そのデータが官邸のオペレーションルームに送られたということですが、それがいま言った最高指揮部には届いていなかったという事実があります。そこから何度も送られてきたようですが、そのほとんどは全く届いていませんでした。それが後になって、いつごろかはいま記憶が定かではありませんが、国会が始まり出してからですか、その SPEEDI はどうだったのかということで、私はわかったということです。

SPEEDI の結果を後から見て、やはりいま問題になっているホットスポットとかなり合致していますので、そういうことがあれば退避指示を出すときに参考になったのではないだろうかと思います。その意味では大変残念なことと申しますか、本当に内心じくじたる思いがこの SPEEDI に関してはあります。

そのほか海水の話やベントの話などいろいろ言われていました。これは本当にいま思うと、いい面、悪い面両方ありますが、私ども官邸サイドと東京電力の間に不信感があつたのではないだろうか思います。ベントがなかなかできない、それから淡水が切れて、すぐ海水への切りかえもなかなかできなかったと報告を受けたとき、やはり東京電力は、例えば原子炉の廃炉にちゅうちょがあるのではないかと思います。これは、実際に現場ではそうでなかったということはもう明らかになっていますけれども。当初やりとりをしながら、ベントをやるとなれば当然避難指示を出さなければいけません。そうすると大ごとになるというので、ベントをしないで済ませようとしているのではないだろうか。今にして思えば、特に現場の声を聞いてみればそんなことは全然ないとわかったわけですが、実際にいろいろなやりとりを当初している中で、私どもにそういう疑念があつたことは事実です。

私自身、それまで東京電力の労働組合の人たちとは何度か交流もありましたし、そういう人たちがぜひ発電所を見てくださいというので、柏崎刈羽の原発や六ヶ所村を見てきたことはあります。ただ、私は（東電の）清水社長にも事故が起きるまで一度もお目にかかったことはありませんし、勝俣会長にも一度もお目にかかったことはありません。お互いが知り合っていてあまりなれ合いになってもいけません、東京電力の最高幹部の人たちがどういうことを考えているのか、あるいはどういう人柄なのかわかりませんでした。特

に幹部の方々も最初のところでは、勝俣会長は中国に行っている、清水社長は関西方面に出張中だということで、事故が起きたときにその最高幹部の2人が本店にいませんでした。私などにとっては、何をやっているんだという意識になったことは確かです。帰れない状況があったわけですが、いつまでたってもなかなか本店にいないということで、一体どうなっているんだと、かなり不信感がそのことで大きく広がったこともありました。その意味ではとにかく法律にのっとりた指示、命令といったものをかなり強固に出さなければ、言うことを聞かないのではないかという意識があったのは確かです。

恐らく東京電力の側にも、そういう考え方はあつただろうと思います。自分たちの本当に思っていることが伝わらない。昔ならば経産大臣と東電の社長、会長はもうツーカーの仲で、何度もいろいろな意見交換をしていたのでしょけれども、私どもはそうでなかったということが事実としてあります。それが東京電力は何を考えているのだらうと、場合によってはなるべく事柄を小さく見せようとしているのではないだらうか、廃炉にちゅうちょがあるのではないだらうかという、一種不信感に似たものになったことは事実です。

それから15日に、「撤退」という言葉は使わず「退避」という言葉だったと思いますが、第一発電所から第二発電所への退避と、私は聞いています。一部の人が残ってということでは部分的な退避であつたという東京電力の言い方がありますが、私が清水社長から電話を受けた理解では全員の退避だと理解しましたから、それで総理に、これは大変なことになるとということで相談をしたわけです。

あの状況で全員が退避となると、つまり発電所の1号機から4号機、5、6号機も当然そうだらうと思いましたがけれども、コントロールがきかなくなり、次々に爆発を起こし、それこそ本当に東日本が国土からそがれるようなことになるのではないだらうか。あるいは、場合によっては東京の人たちが逃げなければならないのだらうか。清水社長からの電話を聞いたとき、まさに背筋が凍る思いをしたわけですから、一部の人を残してほかの人を部分的に退避ということではなかったように思います。大変なことになると頭の中で思い描いたことは覚えているので、恐らく電話のやりとりもそういうことであつたのではないだらうかと思います。

官房長官のところにも電話があつたようですが、それでとにかく本人を呼ぼうということで、それで清水さんが官邸に来たのが、初めて会ったときでした。そんなことではだめだから、とにかくどうなっているのかと。

官邸では、情報はテレビからがほとんどでした。地下のオペレーションルームはあまり詳しく言えませんが、基本的に地震と津波でほとんどスペースを割かれてしまいました。あと流していたのは、テレビ局の映像です。ですから、とにかく発電所の映像が一つ欲しいと言いまして、NHKからでもいいからもらってそれを流してくれるようにと。NHKには断られて、福島放送からもらいましたか、それで流すようにしていました。だから、民放の映像でした。

それは地下のオペレーションルームで、上のほうにはそういう映像はありませんからテ

レビを見ながらでした。つまり情報が三角形になっていて、私たちは官邸にいる、清水社長、勝俣さんは本店にいる、それから吉田所長以下現地のグループがいると、こういう格好でした。主に、ここでやっていたわけですから。通信状況は非常に悪かったですけれども、固定電話がありましたから、ごくまれに私も吉田所長とベントのことで話したことがあります。主にこういう形でしたから、これはもう非常に情報の疎通が悪いということで、とにかく東電本店へ乗り込んでいったわけですから。

東電本店にはご承知のようにテレビ電話のシステムがありまして、四六時中、福島第一の免震（重要）棟と（東電の）オペレーションルームとはつながっていますので、こちらの意思がすぐ伝わります。ただ免震棟はまさに地震対策で、新潟の地震があつてつくったわけですから。地震対策の建物であつて地震には強いですが、放射性物質の気密性などはあまり確保されていませんでした。それで、大慌てでベニヤなどを張ってやっていました。私が心配しているのは、やはりかなり大量の放射能を浴びた方たち、免震棟の中に入るだけで浴びた方もかなりいますので、本当の意味で放射能に備えた、緊急事態の司令部に使えるものがなかったことは大変残念です。ただ免震棟があつたので、何とか必要最低限のところは守られました。東電の本店に行くと24時間やりとりができますから、それは非常によかつたと思います。ただ、免震棟の中に閉じこもっていると、実際外で何が起きているのかほとんどわかりません。免震棟のオペレーションルームに行きましたけれども、あそこはテレビの会議のシステムがありますね。その切りかえをするとテレビの画面も映るようになっていましたけれども、基本的にテレビの映したものを見るやり方しかありません。独自の映像がありませんでしたから、先ほどお話ししたように15日に行った時点でカメラをつけたという状況です。私と、菅総理も一緒にあそこに行きましてから、こちらの意思が正確に伝わる、向こうの状況が正確に伝わるということで、比較的うまくいったのではないだろうかと思います。

もう一つは工程表です。この工程表は、4月12日に菅総理から指示があつて、4月17日に第1次の発表となっているはずですから。4、5、6、7月が第1ステップ8、9、10月、第3次からは6カ月ですから11、12、1月ですね。これは、たしか4月17日だつたと思います。総理の指示があつてから5日間できたわけですが、お気づきの方もいらっしゃると思いますが、あんな中身が5日でできるはずがありません。これは私と秘書官で、とにかく何か目安をつくらなければいけないということで、最初は私が口頭で言って、秘書官が自分でパソコンを打ち、ごくラフなものをつくりました。第1ステップ、第2ステップを、最初は短期的目標、中期的、長期的と書きましたが、そういうものを持って菅総理のところに行きました。なかなか菅総理からは許可がおりませんでした、それでもだんだんグレードアップしていきました。

それから東京電力では、今度おやめになった武藤副社長が一生懸命やってくれました。武藤さんは、当日はすぐ現地に飛んでいきましたから11、12日にはいませんけれども、この工程表については大変一生懸命やってくれました。経産大臣をやめることになりました

から、東京電力に行ってこれでやめますという話をしたら、勝俣さんは「あの工程表は本当にありがたかった」と言ってくれました。あれは東京電力がつくったことになっていすけれども、政府側と、特に私は非常に気合を入れてつくりました。気合を入れてという表現はあまり適切ではないかも知れませんが、やはりああいう目標がないといけませんから。ただ、目標に向けてかなり無理をしたところもあります。かなり保秘を徹底させましたので、現場の声をどこまで聞けたかについては若干反省もあります。ただ、あれはやはりつくってよかったと思っています。

ファーストステップを3カ月、セカンドステップを最初3カ月と言ってきましたが、やはり少しのり代を持って6カ月がいいのではないかとということで、3から6カ月ということにしました。ああいう一つの大きな目標があつて、もちろん本当の意味での工程表はまた別途あるわけですから、それはそれで。ロードマップといいますけれども、あれは非常によかったと勝俣さんも言っていて、あれがあつたおかげで計画的に物事が進んでいるということで、本当に私も苦勞してつくってよかったかなと思います。

全く雑駁ですが、とりあえず30分お話をしましたのでこのぐらいにしまして、あとは皆さんの質問に答えたほうがいいのではないかと思います。ありがとうございました。(拍手)
司会 海江田さん、ありがとうございました。それでは、質疑応答に移らせていただきます。皆さんからいろいろ質問を挙げていただいたら、50以上になってしまいました。それをできるだけコンパクトに、いくつかはもう既にいろいろブリーフしていただいたところですのでしよります。最初に原発の危険性の認識についてです。3月11日の震災当日、大臣は何時ごろ、どういった形で原発の原子力災害の危険について、経産省や保安院から報告をお受けになったのでしょうか。また当日、原子炉のメルトダウンの危険性についてどのような説明を受けられたのでしょうか。

海江田 私は経産大臣になったときに、心がけなければいけないのは地震と、地震による原子力発電所の事故の問題という認識は最初からありました。これは一部のところでお話ししていますが、ちょうどあの事故が起きる1週間後の週末に、これも組合の関係で柏崎の原発に見に行つて、地震と原発の事故との関係を勉強させてくれという予定をしていました。地震があつたのが金曜日、その次の週の土曜日に行つてというつもりでいました。経産大臣として行くところの社長が出てきたりいろいろありますから、とにかく労働組合に言つて、お忍びでというのもおかしいですが、行くつもりでいました。ですから私は、地震が起きたとき原子力の問題は大変で、ここを何とかすることは経産大臣の危機管理のかなりの部分だという認識は持っていました。実はいつ地震が起きてもいいように防災服も2着頼み、1着はうちに置いて、とにかくそれを着てすぐ出かけられるようにと心の準備をしたことは確かです。

ただ、津波は、はっきり申し上げてほとんど念頭に置いていませんでした。地震があつたのは14時46分、国会で参議院の決算委員会にいて、そして経産省に戻りました。経産省に戻つたのは、午後3時ごろだったと思います。原発はどうしたということを知いたら

「制御棒が入って、停止をしました」というのが第一報です。それを聞いて私の中では、まあよかったと、停止をしたなという確認をしました。むしろ私が経産省で受けた報告は、原子炉はそういう形で制御棒が入って緊急停止をしましたという話と同時に、停電が各地で起きていますという話、それから京葉地帯のコンビナート火災の話が入ってきました。

その意味でいうと、ああ、そうか、コンビナートの火災は大変なことになるなど。それから各地の停電ということですが、東京電力ですから、東京の大停電が起きたらどうしようということ。原子力発電所は制御棒が入って停止しましたという話と、各地で停電が起きている、京葉で火災とこの三つを聞きましたから、どちらかという私は後ろの二つに力点を置いていました。

そうこうするうちに原子炉等規制法による 10 条（通報相当）事象と、そのすぐ直後に 15 条事象が入ってきました。この二つは、ほぼ同時刻に私のところに入ってきました。ただ、15 条事象になると原子力災害対策本部を立ち上げなければいけません。その間に 1 回、経産省としての会議を開いています。この時点ではまだ 10 条や 15 条は入って来ていませんでしたから、ほとんど原子力については簡単な、各発電所の制御棒が入ってとまったという報告があり、わかりましたという話で、むしろそのコンビナートなどの話がありました。その会議は 2 階の大きな広間でやりましたが、会議が終わって自分の大臣室に戻ってきたら、どうも 10 条と 15 条だという話でした。15 条とはどういうことか、電源が失われて、特に水が入らなくなった、冷却できなくなったという話で、それは大変なことだと。保安院の院長はもう危機管理センターに行っていましたから、保安院の原子力の専門家、技術職員を連れて、私と秘書官、SP と、ふだんあの車は 4 人で乗りますが、後ろの席に 3 人乗ってぎゅうぎゅう詰めになって、とるものもとりあえず官邸に行きました。今その官邸に行った正確な時間はわかりませんが、大体午後 4 時少し過ぎぐらいですか。後で調べればわかりますけれども、とにかくこれは大変な事態だと。最初に聞いた、制御棒が入って停止したということではなくて、冷やす水が入らなくなった、冷やすことができなくなったという状況を聞いたわけです。

それからメルトダウンという言葉は、いつ聞いたという記憶がありません。1 回ぐらい戻りましたが、実際にそこからもうずっと官邸に入っているいろいろな話をしている中で、東京電力も保安院も、水が入らなくなると何時間後にこういう状況になりますという予測をそれぞれ立ててきます。その中で、大体燃料棒は 4 本ぐらいですけれども、まず水が入らなくなって下まで来るのに何時間ぐらいかかる。それから、いわゆる「燃料の溶融」という言葉でした。「燃料の損壊」というのは被覆がはがれて、たばこのフィルターぐらいの細かくなっていますけれども、ジルコニウムがどんどん溶けていくと。「燃料の損傷」という言葉と「燃料の溶融」という言葉はその段階、つまり当日 11 日の夜かなり遅くなって、ではどうなるのかという予測で出ました。

燃料が溶け出しますという話で、ここでいういわゆるメルトダウン、もうかなり幅の広い概念ですけれども、燃料が溶け出すのということはその時点で聞いています。保安院も

その意味では、このまま水が落ちていくと燃料が損傷して溶け出しますという話がありました。それは、たしか27時ごろです。それだけは、なぜか僕は覚えています。「27時というのは何時だ」「午前3時ごろです」という話があって、では大変だから、とにかくそれまでに水を確保しろと。水を入れ続ける方法はどういうものがあるのかということで、いろいろな話をしていました。

司会 次の質問に移ります。原発の停電情報につき、菅総理が突然「おい、それは大変なことになるんじゃないか」と言い出したというのは事実でしょうか。菅総理は、やはりそこにいたメンバーの中では原発に詳しくたのでしょうか。

海江田 その言葉は覚えていませんけれども、先ほど東京電力に対する不信があったということは一つお話ししました。あともう一つ不信というのは、私などは本当に素人だという認識があります。私より詳しいことは確かですが、菅総理がどういう認識かはわかりません。もう一つ、例えば水素爆発の可能性についてそのときいた保安院の人間、あるいは東京電力の技術者の武黒さん、それから班目委員長たちが政治家——私と総理と、官房副長官が入ったり入らなかったり、細野君は少しおくれましたが、細野君が入ったり入らなかったり、とにかく私もずっとそういう技術をわかっている人たちといたわけですが、水素爆発という言葉は彼らから出てきませんでした。

水素爆発の危険性、つまり先ほどのお話の中で被覆管が溶け出して、破損をして、ペレットの状態から溶け出していくと、そこでジルコニウムと反応して水素が出てくるのでしよう。当時は知らなかったけれども、後になってわかりました。この水素が酸素と、4対1か何かの割合で結合すると。これも後で知ったことで、被覆管の破損やペレットの溶融から水素が出てくるから水素爆発の危険性がありますよという指摘は実は全然ありませんでした。だから突然です。

私などは爆発、爆発と言っていましたけれども、これは圧力が高まることによる水蒸気爆発を考えていたわけですが、ただ、まさに炉はそれぞれ堅牢にできているわけですから、それからベントが一部成功してその圧力も減っていますから、はっきり言って少しほっとした時点があるわけですが。そうしたら、その間隙を縫って爆発をした。炉が爆発したのではない、ではどういう爆発なのかというところで、水素爆発だろうという話になったわけですが。ですから、その水素爆発の予測、可能性は、居合わせた技術者からほとんど出てきませんでした。そこで今度は、この人たちは本当に平気なのだろうかという思いが出てきたわけですが。その場に居合わせた技術者に対する不信感、私にも生じてきました。

菅総理は自分が東工大の、工学部ですけれども理系ですので、いろいろな形で知り合いもいて、そのとき外部の人たちと総理執務室で、いろいろ電話でやりとりをしていたことは事実です。私は、後になっていろいろな方から話を聞きましたけれども、別にそういう知り合いもいません。なので、彼らの言うのがどれほど正確なのかなということで、若干この人たちの言うことも疑ってかからなければいけないなど。それから保安院の中でもいろいろな意見を持っている人たちがいましたから、もう少し幅広い意見を聞いてみなければ

ばいけないと思いました。

その意味で菅総理は官邸に当時詰めていた原子力の専門家に対する不信を恐らく持ったでしょうし、そのとき菅総理の知り合いの中にそういう技術者あるいは原子力のことに詳しい人がいたはずですから、そういう人たちから意見を聞いていたのではないだろうかと思います。これはあくまでも推測ですから、本当はご本人にお答えいただけるのが一番いいですが。そういう意味では私よりはるかに知識がありましたし、そういう人脈も持っていたと思います。

司会 あくまでこれは福島原発事故に関するのですが、震災直後危機管理センターに当初集まったときの様子を教えてください。その当日どのような事項が福島関連でまず話し合わせ、決定されたのか。これとの関連で、危機管理センターから官邸5階の、総理室横のオペレーションルームへ移ったわけですが、その理由はなぜですか。危機管理センターにずっと詰めてというはずだったのに、なぜそうではなかったのか。そこでどういう意思決定がどのように行われたのか。この辺のところについて教えてください。

海江田 私はすぐ危機管理センターに行ったわけですが、もう既にオペレーションルームは地震と津波での態勢になっていましたから、先ほどお話ししたように中2階のところに行ったということです。この危機管理センターというのは、これは言ってもいいと思いますが、一切携帯電話が通じないようになっています。使ってはいけません。携帯電話を預けなければいけませんし、一切使えないようになっています。それが主な理由です。ほとんど外部と連絡がとれないということです。先ほどお話ししたように専用の有線電話がありますが、それ1本しか私らのチームが自由に使えるものではありませんでした。それで、上のほうに行くと。そこなら携帯電話が使えますから。それが主な理由です。

それから、原子力災害対策本部の会合は開きました。ただ、そこで一つ一つ会合を開いてということよりも、特に11、12日はもうその場で判断するしかできません。とにかく私の、経産大臣の権限で決められることは即座に決めて、避難誘導、退避の命令や指示は本部長でなければ、経産大臣にはできませんから、そういうものは相談をしながら総理の判断を仰ぎました。私の権限でできることはその場でやって、報告をしたということです。

地下1階から総理の執務室の5階まで一々報告に行くのもなかなか大変ですから、それならもう隣の部屋に行って、今こういう状況ですと。それから向こうも気になれば入ってきてということができましたから、やはり便利なことは便利でよかったと思います。

ただ、応接室ですから最初はテレビも何もなかったもので、大きなテレビを急遽持ってこさせて据えて、それを見ました。あとは、応接室で壁にあまり紙をべたべた張るわけにもいきませんから、ホワイトボードを2台ぐらい持ってこさせて、そこでいろいろな図解をしたり、重要情報をそこに張り出したり。にわかづくりで、スペースがなくなったのでかいていた原子炉の絵を消してしまってもう一回かき直すとか、いろいろやっていました。ホワイトボードと、あと模造紙を持ってきて、そこにマジックで炉の様子をかいて、何時になるとこうなるとか、いろいろなことをみんなでやっていました。移ったのは主に

その電話、外部との連絡の件と、総理と近場のところで判断しようということです。

司会 ありがとうございます。あるところで伺いましたが、5階から事実上地下1階の危機管理センターまでエレベーターもとまってしまったので、ばたばた走ったり、駆けて上がったたり下がったり大変だったという話を聞きましたが、そんなことはありませんね。

海江田 官邸のエレベーターは動いていました。

司会 これはセキュリティーにかかわることがあるかもしれませんが、東京が全部停電になっても官邸の電気は、自家発電があつてきちんと動きますね。

海江田 あのとときは動いていました。

司会 次の質問に移りましょう。ベント関連なので先ほどいろいろ既にお教えいただいておりますが、11日夜の時点で東電から官邸に、2号機がメルトダウンする可能性が高いというかなり悲観的な情報が上がっていたというのは事実でしょうか。

海江田 ベントは2号機と1号機、両方必要性があるという話でした。ところが途中で2号機のほうが、たしか少し緊急時の水が動き出したということになって、それで一息入れたときがありました。ちょっと待ってください。クロノロジーが見当たりませんが、ありますか。

司会 こんなものがあります。(手元にあつた資料を示す)

海江田 2号機は緊急時の注水機能が回復したという話になって、それでとにかく1号機を優先させようという話でした。最初に入ってきたのは1号、2号が同じように危険な状況、圧力が上がっているという話でしたけれども、途中で2号機は少なくとも注水の機能が回復したという話から、ではベントはとにかく1号機を先にしようと、そういう話になったことは確かです。記憶があります。

司会 そのときに、戻りますけれどもメルトダウンは予測の中で、炉心溶融というか損傷という言葉が出たと。27時だったというお話でしたけれども、2号機の今の状況に関連して、これは予測ではなしに部分的にせよもう始まっているというような報告が、保安院なり東電から大臣のところがありましたか。

海江田 その時点では、とにかくやることはベントをやって圧力を逃がすことと、水を一刻も早く注いで炉心を冷やすこと、その二つが私に課せられた任務だと思いました。そしてなかなかそれがうまくいかないわけですから、とにかくそれを続けるということであつて、この二つができていれば、どういう状況であってもその被害を最小限にとどめると。

全部が溶けて下にあつて、それが下からどんどんチャイナシンドロームみたいな形で、建屋の下のコンクリートより下のほうにどんどん行っているような、まだそこまでは行っていないと思ひましたから。少なくとも圧力容器と格納容器との間には制御棒などがあつて、溶けた燃料の一部が下を伝わって格納容器に行っている可能性はあるという話は聞いていました。だから、とにかく冷やさなければいけない。それから格納容器にたまれば圧力が高まりますから、今度は圧力を逃がさなければいけない。本当にこの11日の深夜から12日にかけては、やることは水を一刻も早く大量に注ぐこと。これもおぼつかない状況で

したし。それからもう一つは、炉の圧力を逃がすこと。この二つが私の仕事だと思っていましたから、それに専念したということです。

司会 東電は、3月12日午前1時半ごろには、1号機のベントの実施について総理大臣、経済産業大臣、原子力安全保安院を訪れて申し入れを行い、了解を得たとしています。そうであるならば、海江田大臣から同日の午前3時にベントの指示、午前6時に命令を出しているのはどういうことでしょうか。東電からの連絡が大臣まで届いていなかったということでしょうか。

海江田 私は炉の圧力が高まっていますという話は聞いて、では炉の圧力が高まっているのならどうすればいいのか、ベントをやることだと。そうか、ではベントをやれと。そうしたら東電からも、ベントをやるという申し出がありますと。これは事業主の東電がやりますからという話で、そういうものだと思っていました。そういう話は、もう深夜12時のもう少し前ぐらいからずっとやっていました。ところがそれが実際になかなか行われないので、いつまでもベントが行われなければ命令を出すしかないと思ったわけです。ただ、その命令自体はもっとずっと後になって出しているわけで、私が午前3時に経産省に戻って緊急で会見をやったときは、圧力が高まっているので、それを逃すためにベントをやりますと、東電からそういう申し出がありましたという形で緊急の記者会見をやっています。ウェットのベントですけれども、それをやれば当然放射性物質が大気中に飛散することになるから、避難もしなければいけないということを、初めてのことであります。そのときに、私の記憶では東京電力がやる、主体は東京電力で、東京電力からそういう申し出があるということは言っているはずですよ。

司会 12日早朝の、総理の福島第一原発現地視察について、海江田大臣が知ったのはいつですか。大臣は、それに賛成されたのですか。

海江田 これは総理が自分から言い出したことであって、それをとめる権限は私にはありません。いつ知ったかというのはあまりはっきりしていません。ただ、行くことになったということで。あのころはまだ暗かったですから、明るくなって、ヘリコプターが飛び立てるような状況になったら行くことになったという話は聞いたわけです。

司会 大体何時ごろですか。大臣が6時50分に命令をして、総理が9時過ぎですか。

海江田 もっと早い、6時何分に出たのではないですか。

司会 6時にスタートですね。

海江田 スタートしていますでしょう。はっきり言って私はベントのことで頭がいっぱいでしたから、あまり総理の行動については関心がなかったという申しわけないけれども。

司会 例えばそのときに保安院のトップとか、保安院のだれかをつけてくれとか、そういうものはありませんでしたか。

海江田 ありませんでした。ただ、班目さんは行ったようですね。

司会 班目さんは行きましたね。

海江田 保安院は行っていないのではありませんか。

司会 保安院は、もう既に池田さん(副大臣)が現地に行っていて、出迎えているときに黒木審議官が行っていますね。

海江田 そうですか。ただ、一緒のヘリコプターで行ったのかそれはわかりません。

司会 次の質問です。海江田先生は3月12日午前に「1、2号機の格納容器の圧力を抑制すること」、午後に「原子炉圧力容器を海水で満たすこと」を指示しておられます。ほかに経済産業大臣あるいは官邸のリーダーシップで実施されたシビアアクシデント・マネジメントのケースの実例があればご教示ください。

海江田 シビアアクシデントのマニュアルを見ながらいろいろ物事を決めたということではありませんで、一つ一つの判断をしなければいけないということでした。先ほどからまだ一度も話をしておりませんが、私が非常に苦渋の判断をしたのは、いわゆる低濃度の汚染水を海水に放出した判断をしなければいけなかったときです。もう少しぎりぎりまで待てないのかということはかなり言って、ただ、片方では高濃度の水がどんどん出てきてしまう、それを移す場所がない。そのためには今ある低濃度の汚染水を海に流さなければいけないということで、幾つかできるだけ汚染を回避するための措置は講じたわけですが、やはり最後ぎりぎりのところで私が判断しました。それが事前の、外国に対するメッセージなどができていなかったこともあり、できれば低濃度でも流したくなかったわけですから、あれは非常に厳しい判断だったと思っています。

司会 次の質問です。3月17日に、NRCはBWRの専門家を2名日本へ派遣したと発表しました。彼ら、あるいは他の海外、特に米国の専門家の知見は、事故後の対応にどの程度反映されたのでしょうか。関連質問で、アメリカから海江田大臣のところには、だれからどのような連絡が来ていたのでしょうか。事故直後、官邸にアメリカとの合同会議が立ち上がるまで、この二つの期間でのアメリカとのやりとりについてお教えください。

海江田 NRCとは常駐の人も置いてくれましたのでかなり連携をとっていました。私は直接その窓口になりませんが、これは細野君のほうがよく知っていると思いますが、福島で起きている事象についての具体的な判断、どういう対応をしたらいいのかについてのアドバイスを受けました。その意見が、東電側とかなり違ったこともあります。ちょっといま具体的な例は思い出しませんけれども、やはり窒素の封入などをアメリカ側はかなり早い段階で言っていたはずですが、日本は少し窒素封入の時期が遅れたわけで、やはりもう一回再爆発があるのではないだろうかということで、早い段階で窒素の封入を言っていたけれども、なかなか窒素の手当てなどが間に合わなかったこともありました。かなり早い段階でアメリカが言っていて、日本側がそれに対して、やったことはやりましたが、対応が遅れたことではないだろうかと思っています。そういう形で、アメリカ側とは非常に連携をとりながらやっていたのは確かです。

私とアメリカ側との対応ですが、私とはとにかく一番の責任者でしたから、NRCの責任者などいろいろ表敬訪問を受けて、あとは具体的に細野さんと相談してくれと。あるいは長島代議士もアメリカ側と随分いろいろやっていたから、私が直接アメリカ側とこう

しよう、ああしようと具体的に詰めたことはありません。先ほどの窒素の封入のところは東電の本部の中で、私がいたのは2階のオペレーションルームですが、上で会議をやっていたので、その会議に参加したときにそういう話を実際聞いたということです。

あとエネルギー庁の、アメリカのチュー長官などは日本に来て、これも表敬訪問ですけれども、いろいろな意見交換はしました。そういう形で、アメリカの責任者が来るとその人たちが主に表敬訪問をそれたので、いろいろやりとりをしたということです。特に突っ込んでこうしよう、ああしようと議論を交わした記憶はあまりありません。

司会 次の質問に移ります。福島原発事故の評価について、3月18日にレベル5と暫定評価していました。諸外国がレベル7だと指摘していたにもかかわらず、レベル7に引き上げられたのは4月12日でした。この報告を、海江田大臣が受けたのはいつでしょうか。

海江田 その当日で、レベル5という形で発表しますというときに報告を受けたと思います。どうしてレベル5なのかといろいろ聞きますと、まさに放射性物質の飛散の量などが、自分たちはそう推測をするということでした。実際の数値はないわけで、そういうものだという形で言ってきましたから、そこはこちらも反論するだけのデータはありませんので、そうですか、ではそれを発表してくださいと。できるだけ早く発表しましょうと。私らは、そういうのを隠すということは絶対避けなければいけませんから、方向が決まったらとにかく早く発表しましょうという形でやっていました。最初からレベル7だったけれども、それをレベル5にわざわざ下げたということはありません。その時点でわかっているデータに基づいてやったということです。

司会 これは、統一地方選挙とは。

海江田 全く関係ありません。

司会 全くない、一切なし。

海江田 選挙など、もう頭にこれっぽっちもありませんから。

司会 片隅とか、真ん中にある人もいますから。

海江田 全くありません。

司会 次は保安院の役割ですが、これも幾つか質問があるのでまとめます。震災直後、保安院の専門家の提言が官邸に届かなかった、あるいは十分に検討されずに放置されてしまったとの指摘があります。そういうことだったのでしょか。

関連なので、先にお聞きします。保安院とのコミュニケーションは円滑だったのでしょうか。大臣として判断を下すのに、十分な情報が得られていたのでしょうか。もしできれば、具体的に何が一番必要だとお感じだったのか、十分にそれが満たされたのかどうか。これについてお答えください。もう一つ、関連です。原発事故を防げなかった背景に、経産省、保安院が東電に取り込まれ規制機能が働かなかったことがあったのではないかと。また、結局は東電が情報面、人材面で対経産省、保安院に対して優位に立ってしまったという背景があるのかどうか。お答えください。

海江田 まず保安院の意見があつてそれが届かなかったということですが、どういう意見

があってそれが届かなかったのかということ、言っていた方がいいのではないのでしょうか。少し一般的過ぎて、お答えが難しいなという気がします。

一つだけ私が残念だったと思うのは、先ほどもお話ししましたが SPEEDI の情報です。SPEEDI はまさに文科省がやることになっていますけれども、実際にやるのは財団法人の本当に解析のところ。ただ文科省がやって、それが保安院に届くわけです。それが実際私たちの元に届いていなかったわけです。やっていることを保安院のかなりの人たちは知っていたわけですから、その情報が届いていなかったことは非常に残念です。それをだれかがとどめていたのかどうなのかはわかりませんが、SPEEDI に関する情報は、私は非常に大事だと思っています。保安院というのはご承知のように、専門家と、専門家以外の事務系統の人たちがいます。もちろん事務系統の人たちも、保安院の行政をやってくればある程度わかるわけですが、ただ、だれが本当に保安院の中で信頼できる、この原子炉のことに知見を持った人たちなのかわかるのに、かなり時間がかかりました。最後のほうでは、いろいろ話をしていく中でこの人の能力は頼りになるなとか、この人は外国に対する説明能力は非常に高いなとか、いろいろそれぞれの保安院の人たちの特徴がわかってきますけれども、最初集まってわっと話したときには、だれにどういう能力があって、どういう知見があってということがわかりませんでした。その意味では、保安院と私とが対話をするのは難しかったなと思っています。

最後の東京電力との話はいろいろな形で指摘されていますが、何か事故が起きてから東京電力の立場を守るとか、そういうことはほとんどありませんでした。これまでのことについてはいろいろなことがあったと思いますけれども、事故が起きてからはしっかり東京電力に対しても物を言っていたように思います。過去のことについてはわかりません。

司会 SPEEDI というのは、特に司令塔の政務の皆さんがだれも、言葉も存在も知らなかったと。多分そうだと思いますけれども、保安院はまず大臣に SPEEDI というのがございます、これだけは避難の問題になりますから頭に入れておいてくださいと、当然言わなければいけませんね。一番重要なことの一つですから。今のお話だと、それがなかったということですね。それに対して大臣のときに、何で君たちは一番肝心なことを報告しなかったんだと当然ご叱責されたと思いますが、この辺はどうでしたか。

海江田 (叱責) しました。それは当然です。そうしたところマニュアルを持ってきて、マニュアルの説明によると SPEEDI が有用なのは、まさに放射性の物質の放出量などがわかったときにそれを使うという書き方になっているわけです。保安院の言い方は、確かにやりましたけれども、最初のほうはすべて仮定の数字を置いたと。

司会 中の数字はわかりませんからね。

海江田 そうです、わかりませんから。先ほどもお話ししましたが、最初はたしか1号機のベントでやっています。しかもベントを1時間だけやったという推定に基づいていて、実際にはそれができたり、できなかつたりということですから。ほとんどいろいろな仮定を置いてやっていますから、その仮定を置いてやったものはいわば予行演習みたいなもの

だから、それをお届けするわけにはいかなかったという言い方ですね。原子力災害対策マニュアルをよく読むと、何かそれらしい記述があります。だから微妙です。ただ、あるなら全部持ってこいという話ですけれども。それでもいいから、とにかく持ってきてほしかったということは言いました。

出席者 1 全く同じ質問ですが、東電から 15 条通報の通報資料で、ベントの結果どちらの方向にどれだけのプルームが行くというものがあったと思います。それも、報告には来ませんでしたか。

海江田 聞いていません。ただ、風向きは気になりました。あれは夜間でしたから、夜間は海の側に吹いていますということを言っていました。それが、恐らく東電の報告の中にあったのだらうと思います。

出席者 1 1 時間おきに方向がこう変わってくるというものがありましたね。

海江田 はい。基本的に、夜間は海の側に吹いていますからという話がありました。

出席者 1 それはありましたか。

海江田 はい。

司会 先ほど大臣が懇切丁寧に説明してくださったので、はしょってしまいましたけれども、もう一度東電の撤退の申し出のところ、もう既にお答えいただいたところは省いて、それとの関連です。海江田大臣は東電からの撤退、「退避」という表現だったそうですが、報告があったときにこれを総理、枝野長官にも伝えたというお話ですけれども、このときに海江田大臣は、枝野長官も撤退やむなしと了承したという話もあります。事実ですか。

海江田 いや、それはありません。

司会 それはありませんね。

海江田 僕が枝野さんに連絡をしたことはありません。枝野さんのところにも電話がかかってきたようで、それは私が撤退を認めればもうそこで話は済むわけですから、別に枝野さんに電話もしなくていい。私は、そんなことになったら大変なことになるということと、ただ、やはりあの時点で残せば何百人、あるいは何十人かもしれませんが急性被曝の可能性がありましたので、そこの非常に重い決断をしなければいけないということでした。ただ、私の気持ちの中では、やはり今その何十人かが急性被曝することになってもここは撤退すべきではないと思いましたから、それはそういうわけにはいきませんよという話で伝えました。それから、そのことからこういう話があったと総理に伝えたわけです。私は、撤退すべきなどとは思っていませんでした。

司会 全くなしと。

出席者 2 今の点に関連して、それを大臣が総理に、お電話なのか秘書官を通じてなのかわかりませんが報告をされて、電話で直接聞かれたり、例えば総理の執務室横のオペレーションルームに実際に集まった形で、それを受けた総理のご反応をごらんになられましたか。

海江田 私は、総理のところへ直接行きました。総理に話したら、そんなことはだめだと

いう話ですから。それで、では清水さんと呼ぼうという話になったわけです。

司会 そのときの総理の反応は、もちろんそんなことは絶対に許さん、だめだということですが、乗り込んで「日本が崩壊するぞ」と演説しましたね。

海江田 ええ。

司会 あの辺の反応は、そのときもう既に出ているわけですか。

海江田 清水社長が慌てて来て、そこからですね。

司会 乗り込んだのは、結局、東電が退避というのをふざけるなど、東電へ乗り込んで本当にそれを言ってやる、退避をさせないということなのか、それとも情報が全然東電から来ない、これではだめだから乗り込んで自分たちがコントロールせざるを得ないということなのか。主要因は何ですか。

海江田 私も、とにかく一緒に行きましょうと行って行きました。私はその前の晩からのやりとりを通じて、先ほどこの三角形の形で伝言ゲームというようなことを言ったと思いますが、非常に隔靴搔痒、情報が入ってこないことに対するいら立ちがありました。これは東電に行けば、もう少し情報が入ってくるのではないかと思いました。そういう意味で私はとにかく現場がどうなっているのか、そこに対して情報をできるだけ多くするためにはこの官邸にいたのではだめだと。東電に行って実際に見てみなければだめだと思いましたから、それで行きました。

司会 これはもう、全部政務のみの決定ですか。

海江田 そうです、政務のみです。

司会 例えば保安院にしても経産省にしても「君たち、どう思う？」と。

海江田 一切聞きませんでした。

司会 一切ありませんでしたか。

海江田 はい。

司会 わかりました。最後の質問です。今回の原発対応につき、危機管理の点からうまくいったと思われる点と反省が残る点、もう既に触れていらっしゃるかもしれませんが、改めて一つずつとなるとどういうことでしょうか。

海江田 うまくいった点というのはなかなか、何だろうなあ。初めてのことでしたし、途中かなり混乱はありましたから。一番うまくいった点は、いろいろご批判はあるでしょうけれども、今のところいわゆる急性被曝で亡くなっている人はいないということですね。ただ、先ほどもお話ししましたが、免震棟が放射能に対するプロテクトが十分にできていなかったから大量に被ばくした人がいますが、いわゆる急性被曝という形で亡くなった人は今の段階ではいないということですね。反省することで一つだけというと、やはり SPEEDI のことでしょうね。

私が経産大臣になったのは1月で、前年の10月に実は原子力災害で訓練をやっています。その訓練を受けた関係の人などに聞きましたが、やはり SPEEDI を知りませんでした。SPEEDI の話を後で知ったとき、「ああ、10月の訓練をやっておけばわかったのかな」と思

ったわけです。そのことはずっと私の中に残っていたので何人かに聞いてみましたけれども、あの原子力の災害のときの訓練で、SPEEDI の架空のデータは利用してやっていたのですが、政務の人たちが SPEEDI について、いや、それは知らなかったというので。実際には、恐らく使っていたのでしょ

出席者 1 茨城県の東海第二の訓練のときをおっしゃっていると思いますけれども、あのときは事故の内容が原子力災害だったかどうか、火災だったような気がします。確認しなければわかりませんが。

海江田 そうですか。

司会 あれは、全電源喪失ではないですか。

出席者 3 やっています。10 月は浜岡です。

海江田 浜岡ですね。だから、やっていますね。

出席者 3 ただ、おっしゃったように官邸には届けていないはずですよ。オフサイト（センター）の中では、使っていたと思います。

司会 あれは、松下忠洋さんが行っているでしょう。

海江田 行っています。

司会 松下さんには聞かれましたか。

海江田 それは、だれとは言いません。

司会 わかりました。

海江田 それは、申しわけありませんが。

司会 あとは自由にどうぞ。

出席者 4 循環型の汚染水の処理と冷却のシステムですけれども、アレバ社とキュリオン社の技術が導入されました。どういう経緯で、そのシステムが選ばれたのでしょうか。

海江田 アレバはご承知のように女性の CEO がかなり早い段階で日本に来まして、とにかく何でもお手伝いをしますというところでいろいろな申し出がありました。その関係ということで、あれはたしか中古品ですね。どこかに備えつける予定を、急遽こちらに回して持ってきてくれという話でした。その辺の、当初は別のところへ据えつける予定を、とにかく早く必要だということでやってくれたり、そういう機敏な動きをやってくれたということだろうと思います。あの女性の CEO が何度も日本に来まして、そういう売り込みが巧みであったことは確かですね。

ただ、最終的に決めたのは東京電力で、こちらがそれではだめだという話はしませんでした。ただ、実際動かしていく中で、もちろん十分な試運転ができなかったということもありますけれども、やはり随分問題が出ました。しかも、たしか中古だったと覚えています。だからこれを早く複線化しなければいけないということで、しからばキュリオン社のサリーですが、その形でやりましようとなったわけです。

出席者 4 アレバ社の技術に関して保安院なりで検討されて、私が仄聞したところでは、当初必ずしも前向きな評価ばかりではなかったと聞きましたけれども、大臣のほうではい

かがでしょうか。

海江田 ええ、私もそういう話を聞いていました。ただ、何分にも一番早く持ってこられるところはどこだということで、それはやはりアレバ社だと聞きましたので、とにかくそのときの判断は、それでもいいから早く持ってきてもらったほうがいいのではないかとということでした。

出席者 2 震災後1週間ぐらいの初期対応の意思決定についてももう一度確認です。先ほど大臣がおっしゃられた最高指揮チームの主要なメンバーとしては、菅総理、海江田大臣、あとは東京電力の武黒さん、班目委員長、そのほかは細野さんと枝野長官が出たり入ったり。

海江田 はい、そうです。

出席者 2 そのほかに、この少数の意思決定チームに加えられるべき名前の方はいらっしゃいますか。

海江田 たしか、保安院の院長がいたりしました。ただ、彼は専門家ではありませんので、いま言ったような人だと思います。

出席者 2 そのメンバー5～6人の中での意思決定のスタイルは、菅総理が大体イニシアチブをとって進めていく形ですか。それとも皆さんが意見を言ってそれぞれ判断していくような形ですか。意思決定の、大体の雰囲気ですけれども。

海江田 私のところで決められることは私が決めました。それは大体文書で上がってくるものもあるし、口頭で上がってくるものもありました。ただ、判断した場合に、こうですよということは総理に必ず伝えました。それから、やはり総理の判断を仰がなければいけません。特に避難などは、先ほどもお話ししましたがけれども本部長ですので、総理と官房長官のところで大体やっていたということです。ただ、もちろんこちらは意見を言いました。それから東京電力はちょっと別ですけれども、班目さんなどの意見は聞いていました。班目さんとは違いますけれども、原子力委員会の近藤さん（委員長）という方がいらっしゃいました。あの人の意見も聞いていましたね。

出席者 5 私も同じく官邸の意思決定という観点から、幾つかディテールについてお伺いさせていただきます。まず、当日地震があつてから原子力緊急事態宣言が発令されるのが夜7時ぐらいで、次に3^{キロ}の避難指示があつたのが夜9時、その3^{キロ}も、県で2^{キロ}の指示があつた後にありました。この発令や避難指示について遅れがあつたというご認識ですか、それとも可能な限りスピーディーにやつたという印象でしょうか。

海江田 原子炉等規制法の15条事象があつて、とにかく冷却がおぼつかなくなったところで原子力災害対策本部を立ち上げたわけです。まず当時は、なるべく保守的に見積もろうと。保守的にというのは、むしろ危険を考えてということです。それからあと片方で、原子力災害対策のマニュアルがありますね。そのマニュアルで3^{キロ}というものが真っ先に出てきた話ですので、それを見ながら事態の進行とともにだんだん広げていったということです。10キロのあたりではもうベントを念頭に置きましたけれども、3^{キロ}の時点

ではまだベントとか、あるいは爆発ということはあまり念頭に置かず、ただ原子炉の冷却が不能になったから、それに対する対応として考えたということです。

出席者 5 マニュアル上は、私が伺ったときは20キロがなくて10キロまでが指定されていて、恐らくタイミング的には水素爆発の後に出ていますけれども、これは政治判断として20キロまでやったほうがいいということですか。

海江田 そうです。それからそのときに、福島市とか大きな町もありますね。この大きなところをやると、何時間かかると。こちらで爆発の危機は何時間後とか一応ありますから。その中で、これは政治的な判断です。

司会 「保守的」という日本語は、何か直訳調の感じがしますね。

海江田 直訳ですね。

司会 普通あまりそういうときに、僕らの言葉では保守的とは使いませんが、これはいつごろからこう言うのですか。

海江田 とにかく原子力対応で役人と話していると、たいてい役人の言葉ですね。

司会 役人の言葉ですか。

海江田 完全にそう言いますね。「これは保守的に見積もった数字ですから、安心してください」などと言われます。

出席者 5 今度はベント時点ですが、夜中の1時ごろに了解したと。時間がかかったので朝6時ごろ命令されていますけれども、さらにベントに時間がかかって、県と東電とで避難完了の調整をしたとかという報道がありました。もともと1時時点で了解していた時点、6時で命令までいった時点、それぞれで避難完了までを念頭に置かれていましたか。

出席者 4 関連でその点もう少し細かく教えていただきたいのは、6時に命令を出されたというまでのタイムラグですね。その時間、どうして命令を出すまでに至ったのか。その避難の完了、あるいはそのほかの要因があつてのことなのでしょうか。

海江田 最初に3時の段階で話したときは、東京電力からそういう申し出がありますので、ベントが行われるということを言っています。そこはもう東京電力がやってくれるものだと思っていたわけですが、その3時の発言から6時までの間でもやはり既に3時間たっているわけです。その3時の会見の前の段階、日付が変わるあたりからベントを早くやらなければいけないという認識はずっとありましたから、それでいうともう6時間たっているわけです。いつまでもできないならば、では命令を出すという発言もしていますし、その意味ではぎりぎりのところで命令を出したわけです。

もう一つ確かに気になったときは避難の話であって、最初の3キロの話、それから10キロの話、だんだん拡大をしていきますから、私は現地の池田副大臣から、どうなっているのかということで話を聞きました。このやりとりはあまり正確な言葉を覚えていませんが、やはり現地で聞くのが一番だと思って、私は現地に聞きました。

もう一つのルートからすると、避難命令、避難の指示が出ると、危機管理監がいますから。この伊藤危機管理監が警察や消防と連絡をしながら、大体何々村ではほとんど終わり

ましたとか、今こういう状況ですという報告は逐一受けていました。

やっぱり夜中というのはあまり、それでもかなり皆さん個別に行って出ていってもらったわけですが、やはり朝になってからかなりそれが進んだという話が入っていました。

司会 最後の質問をどうぞ。

出席者 6 では2点お聞きします。1点目は今とかかわる話ですけれども、ベントを指示なさったときに関係自治体、特に福島県との間で何かしらの調整あるいは了解のようなプロセスがありましたか。もう1点は、いま東電から経産省に対して上げられたかなりのファクスが公開されていますけれども、大臣あるいは官邸の中で、それらの上げられた情報のうちどのぐらいを把握されていたのか。あるいは保安院からどの程度の報告があったのか。ゼネラルな質問ですが、教えてください。

海江田 後ろのほうからいきますと、やはりファクスなどを見せられることはほとんどありません。ほとんど口頭です。現物は、恐らく保安院はつづっていたのだらうと思いますけれども、先ほどの10条事象、15条事象もそうでした、東電から上がってきた資料をそのまま見ることはほとんどありませんでした。これは私だけではなくて、もちろん総理もそうです。そういう状況でした。前段のベントの話ですけれども、片一方で避難のことも考えなければいかんということですが、私は、特に最初の1号のほうはウエットベントだという説明を聞きました。ウエットベントで水の中を通すから、大気中に飛散をする放射性物質の量は格段に低減するという話を聞いていました。先ほどお話をした3^キから10^キということもありましたし、あと海のほうに吹いているということもありましたので、その意味で被害は最小限にとどまるのかなという認識があったことは確かです。ただ、3^キにしる10^キにしる、逃げていただかなければいけない人たちがいるわけですから、その人たちにとにかくきちんと逃げてもらおうよということでした。

あのときはオフサイトセンターがまだ機能をしていましたね。ただ、実はそのオフサイトセンターに来た自治体が少なかったです。全部が全部、参集できませんでした。ただ、私が現地にベントの指示を出しましたから、ベントをやりますからと池田副大臣に電話をしたときはまだオフサイトセンターでした。そのオフサイトセンターが機能して、オフサイトセンターを中心にやっていたはずですが、ただ、その後で調べてみるとオフサイトセンターに来ていた自治体の数が全然少なかったということでした。これからの問題ですけれども、オフサイトセンターの機能が今回十全に果たせたのかどうかということは、かなりしっかり検証しないといけないのではないのでしょうか。

司会 福島県との意思疎通というか権限の調整は、要するにオフサイトセンターでやるということですね。

海江田 そうです、現地対策本部が。

司会 やったということですね。

海江田 そういうことです。

司会 海江田さん、本当に今日は長時間お話をいただきまして、どうもありがとうございます。

ました。

海江田 どうもありがとうございました。

以上